

〔課題演習抄録〕

特別支援学級における協同学習を促す社会科の授業づくり

浦 嶋 莉 沙

Risa URASHIMA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：協同学習，特別支援学級，社会科，授業づくり

1 研究の目的

対象とする特別支援学級に在籍する児童生徒の多くは，学習における困難さだけでなく，日常生活や友達との対人関係におけるつまずきも有している。学校現場では，個別の学習指導・医療機関との連携したソーシャルスキルトレーニングなどが取り組まれている。しかし，涌井(2006)によると学習面に特化したプログラムに重点を置いてしまい，授業や日常生活での集団場面における支援プログラムの開発は世界と比較すると遅れている現状がある。

また，文部科学省中央教育審議会(2012)の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告)」において，共生社会の実現には，多様な方法で社会に参画していくことが求められるとされている。

このような現状を踏まえ，近年，意図的に協力する場面を仕組む協同学習が研究されている。涌井(2013)は，通常学級の学習障害等のある子どもを含むグループにおいて協同学習を実践した。成果として，グループ内の人間関係が向上したことや葛藤を解決するスキルを習得することができたことが明らかになった。また，特別支援学級内で協同学習を進めるために必要な観点をまとめたチェックリストも開発された。しかし，特別支援学級内で，ニーズを抱える児童生徒間で同様の効果があるのか明らかにされていない。

そこで，本研究では，意図的に協力しないと解決できない課題や目標を授業で設定し，特別支援学級に在籍する児童生徒の社会性や人間関係の改善に着目し研究を行う。

2 研究の計画

月	研究事項
1 年次 10～12	○研究構想 ○研究計画の検討・実施
2 年次 4～6	○研究計画の修正・決定（集団随伴性チェックリストをもとに分析） ○生徒の実態把握
7	○事前授業実施(社会科「身近なグローバル化を探ろう」)
9～10	○研究計画の修正
11～12	○質問紙調査(協同作業認識尺度) ○授業実践(社会科「ぼくたちのキャリアパスポートをつくろう」) ○実践の分析(集団随伴性チェックリスト)

3 研究の内容

(1) 先行研究

協同学習について Johnson, et al. (1993) は，「小集団を活用した教育方法であり，生徒が共に取り組むことによって自分の学習と互いの学習を最大限高めようとするものである」と定義している。そして，協同学習の条件を，①互恵的な相互依存関係があること，②対面的で促進的な相互交渉があること，③個人の責任の明確化，④ソーシャルスキル・協同スキルを教えられる機会が保障されていること，⑤活動の振り返りが行われることの5つと設定した。

長濱ら(2008)は，協同作業の認識を測定する尺度を開発した。協同作業の認識を，協同効用・個人志向・互恵懸念の3因子 18 項目で測定することができ，協同するというをどの様に認識しているのか実証的に捉えることができる。

(2) 研究実践

本研究では，福岡県内の A 中学校，特別支援学級において授業実践を行った。

1 年次は，特別支援学級，在籍生徒 4 名を対象

に、自立活動単元[3人間関係の形成(1)他者との関わりの基礎に関すること]の授業実践を行った。単元は「感謝の気持ちを相手に伝えよう」とし、お世話になっている先生方に友達と協力してプレゼントを作り、届けるという内容で行った。授業では、協同作業を組み込み、友達と協同してプレゼントを作ることを行った。

授業では、友達の様子を見ながら、励ましの言葉をかけたり、友達が苦手な作業を手伝ったりする様子が見られた。しかし、作業の途中でどの様に協同するのかがわからずパニックになる生徒がいた。集団随伴性チェックリストをもとに授業分析を行うと、対象集団に適合した強化基準になっていなかったこととセッティング要因に関する事項が不十分であったことが明らかになった。

そこで、2年次は、対象生徒の実態把握を詳細に行い、協同するということをどのように捉えているのか把握するために、長濱ら(2008)の協同作業認識尺度を用いて、事前事後調査を行うことにした。対象は、福岡県内A中学校特別支援学級の3年生2名である。

事前の質問紙調査では、A児は、「グループのために自分の力を使うことは楽しい」という質問項目に対して、あまりそう思わないと回答していた。また、「周りに気遣いながらやるより一人でやる方がやり甲斐がある」では、とてもそう思うと回答していた。反面、B児は、協同するということに対して全体的に肯定的な回答が見られた。これらの事前調査を踏まえ、授業を行った。

授業は、社会科公民分野「ぼくたちのキャリアパスポートをつくろう」の単元を計画した。授業の実施計画は以下の通りである。

回数	活動内容
1次	学習してきたことを振り返ろう。
2次	なぜ働くのか、自分が働く理由を探ろう
3次	各職種の支援制度を調べよう。
4・5次	協同する意義について考え、協同して「キャリアパスポート」を作ろう
6次	「キャリアパスポート」の良さを伝え合おう。

(3) 結果と考察

授業後の質問紙調査では、A児の回答に変化が見られ、「グループのために自分の力を使うことは楽しい」という質問に対して、そう思うと回答した。また、活動の振り返りでは、協同することについて、「B君の頑張っているところを知ることができた。協力することができて楽しかった。」と記していた。1年次の授業実践でパニックを起こし

ていたB児も、振り返りで「A君が調べたことを伝えてくれたので、知らなかったことを知ることができた。」と記していた。生徒の実態把握を行うことによって、生徒がどのようなスキルを必要としているのか把握することができ、どの様に協同するのか生徒が十分に理解した上で、活動に取り組むことができたからではないかと考える。また、A児が活動の中で変化が見られた要因として、B児がA児の頑張りを常に伝えていてくれたことが大きく関与している。B児は、A児の発言を聞くと「すごいね」、「知らなかった」など返答をしていた。この返答が嬉しかったとA児の振り返りにあることから、協同学習の条件である①相互依存関係が授業内で成立していたのではないかと考える。

4 成果と課題

協同学習を通して、仲間と協力することを体験的に学習したことによって、日常生活において自ら友達のことを手伝う姿や、役割に責任をもって行う姿が見られるようになった。また、友達に頑張りを認めてもらうことができ、同じように相手に伝えようとすることができた。自己の発言を優先させていた生徒が、聞いてもらう事や認めてもらうという協同学習でのコミュニケーションを通して、社会性が向上したと考える。

今後の課題として、特別支援学級で、最小限の支援で協同学習をどの様に実施していくのか検討していくことが必要となる。本研究では、教師がファシリテーター役を担い、指示カードや聞き方の見本などを見ながら生徒が学習を進めてきた。仲間関係の改善などに効果が見られたが、永続的なものとしていくためには、最小限の支援で協同学習を実施していくことが重要である。

主な引用・参考文献

- Johnson, D. W. 1993 (石田祐久・梅原巳代子訳) 学習の輪—学び合いの協同教育入門 (改訂版) 二瓶社
- 長濱文与・安永悟・関田一彦・甲原定房 2009 協同作業認識尺度の開発 教育心理学研究第57巻1号24-37
- 文部科学省中央教育審議会 2012 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告) 中央教育審議会初等中等教育分科会
- 涌井恵 2006 協同学習による学習障害児支援プログラムの開発に関する研究—学力と社会性と仲間関係の促進の視点から— 文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)) 研究報告書 課題番号: 14710117
- 涌井恵 2013 学習障害等のある子どもを含むグループにおける協同学習に関する研究動向と今後の課題—通常の学級における研究・実践を中心に— 特殊教育学研究 51巻 381-390